

平成28年度 第2回桑名市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成29年2月2日(木)
開会 午後1時30分 閉会 午後3時19分
2. 開催場所 桑名市役所3階第2会議室
3. 出席構成員
桑名市長 伊藤 徳宇
桑名市教育委員会
教育長 近藤 久郎
委員 伊藤 茂一
委員 松岡 守
委員 稲垣 陽子
委員 松香 洋子
4. 構成員以外の出席者
(総務部)
総務部長 水谷 正雄
総務部次長 駒田 保
総務課長 日佐 龍雄
総務課課長補佐兼総務係長 満仲 弘
(教育委員会事務局)
教育部長 石川 昭人
教育総務課長 山下 範昭
指導課長 野呂 はるみ
学校教育課長 高木 達成
教育環境整備室長 山下 謙一郎
教育総務課管理係長 郡 厚
5. 議 題 (1) くわなっ子の姿と国の動向について
(2) これからの本市の教育環境づくりについて
(3) その他

【総務部長】

皆様、こんにちは。総務部長の水谷でございます。よろしくお願いいたします。

会議に入ります前に、本日の会議の公開についてお諮りをいたします。

本日の会議では、非公開とすべき案件の予定はございません。傍聴希望者がいらっしゃいますので、傍聴人の入室をご了解いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、入室していただきます。

(傍聴人の入室)

【総務部長】

ただいまから平成28年度第2回桑名市総合教育会議を開催いたします。

前は、全国学力・学習状況調査の結果を受けて、本市の子どもたちの学力について、主体的な学習や家庭での学習における課題や、英語教育の必要性など多岐にわたってご議論いただきました。

そして、本日の会議では、事項書でございますように、くわなっ子の姿と国の動向について並びにこれからの本市の教育環境づくりについてご協議をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ここからは、市長に会議の進行をお願いしたいと思います。

それでは、市長さん、よろしくお願いいたします。

【市長】

改めまして、皆さん、こんにちは。

今日は大変お忙しい中、第2回の桑名市総合教育会議にご参加いただきましてありがとうございます。

日ごろ桑名の教育行政に大変ご尽力いただいておりますことに、心から感謝申し上げたいというふうに思いますし、また、この総合教育会議は、私が開くといいますか、教育委員会ではなく、こちらの市長部局として開催させていただくということもありまして、大変いつもご協力いただいておりますことに感謝申し上げたいというふうに思います。

済みません、座って失礼させていただいて、早速事項書に基づいて議題、議事を進めてまいりたいというふうに思います。

まずは、事項の1、くわなっ子の姿と国の動向についてを議題といたします。

事務局から説明をお願いいたします。

【指導課長】

教育委員会事務局指導課課長の野呂です。よろしくお願いいたします。

本日は、テーマ「すべての子ども達に夢と希望を」ということで、資料を作成させていただきました。

平成28年度の全国学力・学習状況調査を受けております中学3年生が、4年前の平成25年にも小学校6年生で同じ調査を受けておりますので、この学年の児童質問紙及び生徒質問紙の結果に着目して、子どもたちの様子を探っております。

まず、今回のテーマ「すべての子ども達に夢と希望を」に関連する質問項目、将来の夢や目標を持っていますかという項目について確認をいたします。

資料2ページをご覧ください。

上のほうは、本年度の結果を研究所が分析してホームページに掲載しております。将来の夢や

目標を持っていると回答した子どもたちの割合を3年間比較していきまして、その結果を見ていきますと、全国と比較しましたところ、小学校6年生よりも中学校3年生で低くなっていくというのは全国も同じなんです。桑名市では、中学校3年生のほうがややちょっと3年間で下降傾向にあり、今回は小学校も全国平均を下回っております。このようにちょっと気になる結果が出ております。

また、今の中3の小学校6年生の結果と比べたものが、その下のグラフになります。わずかな差なんですけれども、中3のほうが全国より低目に出ております。小学校のときには87%ということで、ほぼ全国と変わりはないかと思っておりますが、やや低く出ているという結果がわかりました。ただ、全国的にも中学校3年生になりますと低くなってきますので、これについては、一体どういう変化があるのかなということ、私見も含みますけれども、一般的な理由を私のほうで書き上げてみましたので、3ページの上をご覧ください。

小学校6年生から中学校3年生にかけてですが、教科の学習内容が難しくなる、定期テストで学力が測られていると。受験や、またはそれぞれの家庭背景、経済的な事情など現実の壁を知っていく。社会全体の仕組みや状況を理解できるようになって、個人の限界を感じる場合もある。思春期の心理から夢や希望を素直に表現しなくなるというようなことが考えられるのではないかと思います。

ただ、今の中学校3年生が現在、中学校生活を子どもたちがどう感じ、どんな過ごし方をしているのかというあたりについて、もう少し見ていく必要がありましたので、下のほうから、学校に行くのは楽しいというところから比較をさせていただきます。左側が6年生のときの回答、右側が今年の3年生段階での回答になります。

見ていきますと、学校に行くのは、中学校3年生になっても、桑名の子どもたちは変わらず、85%以上ということで全国よりも高く、学校には通っております。また、次のページをご覧くださいと、自分にはよいところがあると感じているという子どもたちも大変高い割合のまま推移をしております。

また、授業で発表する機会が与えられている、それから、友達と話し合う活動をよく行っているかという質問に対しては、中学校になったほうが、小学校のときよりも機会が多いというふうな割合が高まっております。学校の中での指導の工夫もなされていて、子どもたちはさほど、不満と言うとおかしいですけども、何も発言できないとか、そんなことはないんだなということわかります。ただ、教科学習のところで考えていきますと、5ページをご覧くださいと、国語や算数・数学の授業の内容はよくわかるという回答からすると、やはり国語、算数・数学につきまして、両方ともやっぱり難しくなることもあって、よくわかると答える割合は下がってはいるんですが、数学は全国に比べると高目に出ておりますので、数学の先生方のご尽力がここからもわかるかと思っておりますが、国語の面に関しましては、桑名としてはちょっと課題があるなということはおもっております。

また、国語や算数・数学の勉強についての意識なんですけれども、大切だと思いますかということについて、国語も算数・数学も、中学校3年生になると、かなり下回ってくるというところがあります。これにつきましては、やっぱり子どもたちがどちらかというと受験中心の勉強になっていって、実生活から少し離れた内容になっているんじゃないかなというところが気になることだと思います。

また、算数や数学の授業で、ノートに考え方を書いているかという項目につきましては、中学

校3年生になったときに、全国と比べてやや低目のところがありまして、考えをまとめるというあたりは、あまりなされていないのかなということがわかってまいります。

それから、生活面についてが次から出てまいります。6ページをご覧ください。

子どもたちは、テレビやDVDを見る時間が長いというのは前々から言われているんですけども、本年度の3年生につきましても、小学校6年生、中学校3年生になってもやはり全国よりやや高目に出しております。ただ、決まりを守るかというあたりについては、中学校になると非常に高くなっておりまして、学校ではルールを守り、非常に楽しく過ごしている、家ではテレビを見て、ややのんびり過ごしているのかなという、そんな姿が彷彿とされるような結果もございましたので、今のくわなっ子、中学校3年生の姿のイメージ、このようなイメージがとれるかなというところで、一応ご報告として提示をさせていただきました。

【市長】

なるほど、わかりました。ありがとうございました。

事務局からここまで、くわなっ子の姿といいますか、ここの部分の説明がありましたけれども、ここにつきまして、皆さんからのご意見を賜ればというふうに思います。

また時計回りでいきますか。どうしますか。

【教育長】

それでは、私のほうから。

今ちょっと事務局のほうからご報告させていただいたとおりなんですが、これは前々から言っていますように、夢についてちょっと下がっているということですけども、学校は楽しい、それから、人の役に立ちたいとか、そういうのは非常に高い比率で推移しているんですけども、実際にじっくりと学習とかに取り組んでいくということが少し不足気味だということとございまして、もう一つやっぱり、スマホおやすみ運動というのを前お話しさせていただいたんですが、これはある程度効果は上がってきたというふうには思っているんですが、まだまだ3つの誘惑に負けてしまう。いわゆるテレビを見過ぎる、それからゲームをやり過ぎ、それからスマホの触り過ぎというんですかね、そういう状況があるということはまだまだあるんだろうと思います。

ただ、今回少し重要だなと思ったのが、今、課長申し上げたように、夢を持つことに対して、少し値が下がってきていると。これ、なぜかなということなんですけれども、ご議論いただきたいと思うんですが、特に今の中3の子たちが小学校6年生のときと比べて、少し希望とか夢を諦めてはいないんですけども下がっているということにつきましては、じゃ、この3年間に何かあったのかなというふうに思うんですけども、ちょっと振り返ってみますと、やっぱり貧困の問題がかなり影響あるんじゃないかなと。ちょっと分析まではしていないんですけども、就学援助も中学校の子たちは少し増えてきていると。リーマン・ショックなどで少し全体的に上がったんですけども、それは全国的な動きかと思いますが、桑名として、ここ3年の中でというのはそういう部分が、二極化がちょっと進んできているなということを感じているところでございます。

それとあと、じゃ、中学校の先生がサボっているのかなということを感じるわけですが、実際私も、頻繁に行くわけではないですけど、中学校の現場も見させていただくと、先生たちは非常に頑張ってやってくれているという状況ですので、ただ、やり方にポイントがあるんじゃないかと。採用されて10年以内の先生というのが、もう半分以上になってきているわけなんです。そのあたりを少し考えますと、ちょっと切り口で、最初にお話しさせていただいたんですが、そんな

あたりも今感じていただいているところを、皆さん、ご意見いただければありがたいと、そんなように思っております。

【市長】

ありがとうございます。

じゃ、そのような問題提起なども含めて、ここまでの分でいろいろご議論いただければというふうに思いますが、じゃ、稲垣委員からこう回っていきましようか。

【稲垣委員】

単純に、このパワーポイントを見て、学校に行くのが楽しいというのが高い数値というのは、これは何よりもすばらしいなという感じはしました。ただ、例えば、この次の4ページの発表する機会とか話し合う活動とかの数値が高いということは、学校が楽しくて仲よしで、ある程度コミュニケーションはとれているというのは、人としての最低レベルとしてある意味すばらしいことなんじゃないかなと、組織の中で生きていく上ですと、とは思いますが。やっぱりその次のページのところですよね。先ほど発表がありましたけど、実生活から勉強が離れているんじゃないかというのがありますし、やっぱりわかるということまで、もしかしたら落とし込めていない先生のスキルにもあるのかなとか、わからなくてもいいんじゃないのというような、そんなやっぱり未来に希望が持てていない、ちょっと刹那的な感じ、今が楽しければ、みんな仲がいいみたいな、ちょっとそういうムードも読み取れるのかなというふうには思いました。やっぱりそういうところが夢とか目標とかという未来に対して上向きになれないというのかな、というのは少し気になったので、やっぱりそういうところに少し力を入れていけたらなとは思いましたね。

【市長】

何か先行きが自分たちも見えにくくなってしまっているというか、社会全体が今、ほんとうに不透明ですし、どうなっていくのかなとみんなが思っているところですけども、特に中学生という多感な時期でもあって、そういう部分でやっぱり刹那的って今ありましたけれども、今がよければじゃないですけど。

【稲垣委員】

楽しければ、仲よくやっているし、みたいな感じになっていないかなという、ちょっとこの数字から読み取れる範囲ですけども、少し気にはなりましたね。

【市長】

それは気になります。ありがとうございます。

では、初登場の松香委員、よろしくをお願いします。

【松香委員】

松香です。よろしくをお願いします。

中学生に夢を持たせるには、年齢的にもものすごく難しいですけど、具体的にいろいろ言う、具体的にこういう夢がある、こういう夢があるというものを、ある程度学校教育とかを通して与えていかないと文章化できないのかなというのはあると思うんですけど。今の中3は、センター試験が変わらない最後の学年なんですよね。だから、今、中3の子たちには、おまえたち、絶対浪人するなと、とんでもないことになるぞともうプレッシャーがかかっているわけですよね。だから、今までどおりでいいんだけど、どうにかやればいよとなっていて、中2からセンター試験の内容がすごく変わったり、いろんな教育の内容が変わると、今度は新しい目標を中2からは持たなきゃいけないので、そこら辺に行くときに、今度、もっと思考力を試すとか、文章で書かなき

やいけないのをいっぱい出すとか、英語とかもそうなんですけど、そういうようなことをたくさん言っているんで、文科省が、そっちの方向に入るとなると、中2からは新しい目標ってすごく考えていかなきゃいけないから、それをいち早く教員も、教育委員会も、市長さんもみんなで共有するといいいのかなと思います。

【市長】

なるほど。確かに、今たまたま中3の話ですけど、その下はもっとまた変わってくるということですね。

【松香委員】

変わってこなければならぬから、それを子どもに変わらなきゃいけないよと言われても、センター試験が変わるよと言われても子どもはわからないので、そこら辺が、ちょっと年上の人には子どもたちに具体的な文章とかを与えられるといいいのかなと思いますけど。

【市長】

学校現場にそういう意識があるのかというのがありますよね。高校生になると、おそらくそこってあるんでしょうけど、今の中1、中2の子たちを教える先生たちにその意識がどこまであるのかとか、確かに大事な事かなと思いますね。

【松香委員】

でも、東京とかだと、私立中学の受験とか、昨日あたりだったんですけど、今親の関心はもう入試が変わるということに全神経が向いているというのがあって、やっぱり入試が変わるから私立に入れて、英語とかもやっておいたほうがいいとかいうけど、こういう地方は私立がそんなにないので、それこそ、そういうときにもやっぱりそこら辺の意識を先生たちも持たないと、すごく教育は変わるということの中2から下の担任は持たないといけないと思うんです。

【教育長】

ちょっと口を挟ませてもらっていいですか。

今、松香委員のおっしゃったことは、桑名の中でもかなり関心事であることは間違いないんです。特に塾の先生方とか高校の先生方は特になんですけれども、ただ、中小と下がるほど、まだその意識が薄いんじゃないかなということは思いますので、保護者の方々がかなり考えていただいている部分と、それから、公立の小中の教員がどこまで考えているかなというのは、非常に乖離した部分がありますので、そこについてはしっかりとこれから埋めていかないといけないと思いますし、そのためにどうこうするというのじゃなくて、やっぱり子どもたちの人生を考えたときに、今の改革が目指している部分は間違いでない部分がありますので、そこをしっかりとやっていかないといけない。アクティブラーニングという言葉が盛んに言われていますけれども、じゃ、それに対して今の先生たちがやっている授業はどうなのかというところを考えないといけないと思いますし、ちょうど課長が言いましたように、算数よりも国語が、桑名の子が苦手になっているところがすごく気にはなっているような状況でございます。

【市長】

ありがとうございます。

ちょっと今日は、この後のやつを、ボリュームを膨らませたいということなので、ちょっとここは済みません。

じゃ、松岡さん、お願いします。

【松岡委員】

夢や目標がちょっと中3で低目というのは、何かキャリア教育をするといいいのかというふうに思いますけれども、三重県の子どもたち、後で伸びるといことが言われているので、中3で自分の限界を感じながら、低い目標で固めてしまう必要もないのかなと。そういう意味では、まだまだ可能性を残しておいてもいいのかなという考え方もできるかなと思います。それから、稲垣委員も言われましたけど、学校に行くのが楽しいというのが際立って高いですね。これは非常に素晴らしいことだと思うんですね。学校が楽しくて、勉強がおもしろくて、その意味を理解していれば、放っておいても勉強しますよね。その上で見てみると、国語の勉強は大切だと思うというのが、これまた際立って低いですよ。これがちょっと課題かなというのは思いまして、中学校の国語って、やっぱり大切だと思いますので、大学生を見ても、いろんな文献をあさってもっともらしく論文を仕立てるのは上手なんですけど、ほんとうに100%自分の言葉で書きなさいというと、文章がねじれていたり、主語と述語が合わなかったりとか、起承転結になっているのかなというのを、そういう文章を書いたりすることがあるので、やっぱり国語の力っていろんな専門の基本ですので、そこはやっぱり大切さというのをきちんと伝えて、子どもたちがみずから国語を勉強しようと、そういうふうにもっていくようなことを考えなきゃいけないのかと思いました。

【市長】

おそらくいろいろゲームにせよ、スマホにせよ、文字には触れていると思うんですね。言葉には触れているのに、国語は大切に思っていないというのが何かよくわからないですね、やっぱり。

【松岡委員】

短く、ぱっぱとやれるのはわかるんだけど、もうちょっと長いものをじっくり読むとか、そういうことは何か大切と思われていないんじゃないですかね。

【市長】

この前も出たじっくり力でしたっけ。

【松岡委員】

そうですね。

【市長】

そういうのは非常に大切なんだろうなということがわかりますね。

ありがとうございます。

次、伊藤委員、お願いいたします。

【伊藤委員】

今、大学の入試の制度が変わるということで、過去を振り返ると、共通一次試験からセンター試験が変わるときも、その切りかわる子どもたちは高校でもすごかったです。ほんとうに先ほど言われたように、もう一度受けるなんて大変だからということでもすごかったし、それから、学習指導要領が変わった切れ目においても、過去の問題と新しい問題があるからということで、ほんとうに必死になる。それはどういうことかということ、日本の学びの壁が入試にあるということ。反対に入試の方法によって学び方が全然違う。だから、ほんとうに力が付くようにしようとして一生懸命しているけど、どこかでおかしくなって、一生懸命考えてはいるんだけど、どこかでおかしくなって。

でも、後伸びと言われましたように、三重県の子どもたちは高校の今のセンター試験の平均で

調べるなら全国でも上位であるというのは、前に僕も言わせていただいたと思うんですけど、そういうことは心配ないんですけど、今、教育長が貧困ということを言われて、昔は底があったんです、この辺が、底辺だという。ところが、今底抜けが起こっているんですよ。だから、そこが僕は一番心配です。

でも、先ほど言われたように、楽しいということは興味がある。だから、これが後伸びの要因になっていると思う。それでも中学生でどうこう起こるといのは、やはり家庭という問題、家庭で第一の関心がやっぱりどこの高校へ入るかという、この子がどんな考え方で生きていこうとか、そんなことを大事にする雰囲気がないじゃないですか。なので、ある家庭もありますけど、どちらかという、どこどこ高校へ入ることが、あるいはどこどこ大学へ入る。大学だったらその名前だったらいいので、学部なんかはどうでもいい。だから、受験でも1つの大学でほとんどの学部を受ける子どももいる。えっ、何を考えているのという。先ほど松岡委員が言われたように、キャリア教育というのは非常に大事なような気がするんですけども、かといってなかなか今そんな悠長なことをしていたら、保護者が何をしているんだということになってしまうところもありますので、その辺をうまく先生や親がわかっていける社会に少しずつなると。

やはりスマホもやらせているのは親ですから、勉強しないことを容認しているのも親なんですよね。だから、そういうところをもう一度、先生の教え方ももっと工夫しないといけないところもあるけど、それなら私たちが教えてもらった先生はすごい先生だったかという、今思うとあんなのでよく先生をしていたなという先生もいっぱい、僕も含めてですけどね、そう言うとおかないと語弊があるので。そういうところがあると思いますので、やっぱりそんなに先生の技量は、僕は差がないと思う。ただ、進歩が速いので、この前もある高校の先生と、若い先生ですよ、話をしたら、僕に、伊藤さん、今、生徒と会話が成り立たないんです、私がしゃべっても向こうに通じない。それで、向こうがしゃべること、私は当然わかりませんという。それで、この前、稲垣委員にそういう話をしたら、そうですよ、今、了解は「り」だけですよと言われて、ああ、そうなんだって。

だから、やっぱりそういう世代間が、僕たちは遅かった、大きな波だったけど、今は短いから、先生がどうやって子どもと接していくかというのが非常に難しいところに来ている。それでも、桑名としては底抜けの子を、行政としての支援とか、そういうところと教育として支援とか、その両面がないとちょっと大変になってきているような気はしますね。

【市長】

やっぱり社会全体、貧困の問題は非常に大きくなってきていますし、我々も今、いろんな手だてをさせてもらって、学習支援をさせていただくとか、今回、中学校に上がる時の、入学に要るお金が間に合うようにという形の予算措置をさせてもらったりとか、いろいろしていますけれども、そもそもやっぱり世の中の格差社会が広がっているのを何とか是正していかなくや厳しい部分がちょっとあるんだろうなというふうに思いますね。

あと、もう一つ、今、伊藤委員のおっしゃったように、キャリア教育というか、何かモデルがないんですね、おそらく今の子どもには。前もあったと思いますけど、おそらく今ない仕事につく子たちがいっぱいだと、前回はありましたけれども、おそらくそういう中でロールモデルもない。でも、何もないから夢もない、そういう意味では、何かモデルみたいなものが、僕は地域の人とかでもいいような気がするんですけども、より自分の家族と学校の先生だけではない、いろんな人と会えるような形にしていくのが非常に夢を持てるようになっていくし、ということに

なっていくのかなというようなことは思いますね。

【伊藤委員】

キャリアで、働く仕事の内容もこの後、もう20年もしないうちにどんどん変わると言っていたし、過去を見ると、僕らも自分が育ってきたとき、思っていた仕事っていっぱいなくなったり、いろんなことをしているんですけども、それに対応できる力をつけておくというのが大事なんですよね。だから、その辺がさっきも言った、どこどこ高校へ行くとか、そういう目的になっているから、それに対応できない。そこで、松岡委員が言われた国語が落ちているというのは、自分で今後一生涯学んでいくためには、国語力というのはものすごく必要ですから、やっぱりそこを保護者の方や先生方にもわかっていってもらおうということが大事なような気がします。

【市長】

ありがとうございました。

ここまでいろいろご意見いただきました。何か言い足りないとか、これは言わせてくれみたいなのがもしありましたら、いかがでしょうか。

【教育長】

これ、言わせてくれというのじゃないんですけど、今の伊藤委員の話聞いていて、事前に話もしていたんですけども、その中でもやっぱりお手伝いをさせていないねと、家での手伝いを。全くやっていない。それこそ料理はもちろんですけれども、火を扱うということもしていないお子さんがいて、理科の実験なんかのときでも全然、マッチといたらマッチでなんか全然無理ですよと言われる。チャッカマンでもさわったことがないと、ガスバーナーは全然無理だと思えますし、それと、本を読まないというのも、SNSでやればいいのかなという部分もあるけれども、新聞もとらなくなったよねという話もしていましたし、包丁も触っていないということで、家での、地域の方々のモデルというのも非常に大事なことですけれども、それとともに、家での働くというか、そんなのが全く抜けてきているんじゃないかなと、それをすごく危惧するんですけど。

【市長】

そうすると、今、生活と学校の勉強が乖離してきているんじゃないかという話も、結局生活もしていないですね、この子たちはね。

【教育長】

そうなんですな。

【市長】

何をしているんですかね。

【松岡委員】

テレビやDVDを見ているんじゃないでしょうかね。

これを1時間減らして勉強しなさいとか読書しなさいといってもなかなか難しいので、まずは、1つでもいいからお手伝いしなさい、それは現実的かもしれませんね。

【市長】

ほかに何かありますか。

【松香委員】

何か新しい、スマホをやめなさいとかテレビを減らしなさいというだけじゃなく、こういうことをやったらいいんじゃないですかということがあるといいかと思うんですよね。ただ、読書しなさいといっても、親も本を読まないのに子どもだけ読むわけがないので。オーストラリアのう

ちの孫、育っているんですけど、お父さんが1週間に1回、子どもに本を読んであげなきゃいけないとか、小学校6年生でも出たりとか、そういう家族を巻き込んでやるとか、やっぱり土曜日の朝は家族のためにご飯をつくりなさいとか、そういうすごい具体的なのがあって、昔、早寝早起き朝ご飯というのがはやったことがありましたけど、そういうすごいわかりやすい目標で、やっぱり炊事、掃除、洗濯とかというのは基本だと思うので、それはできなきゃいけないし、読書も基本だと思うんです、人間の。だから、何かそういうくわなっ子らしい、格好いいフレーズをつくって、キャッチフレーズ、早寝早起き朝ご飯なんて、あまりに当たり前で、誰もが何ですかそれみたいなものでも、やると成果が上がるらしいですね、いろんなことが。だから、そういう何かいいキャッチフレーズができるといいかなと思うんですよね。

【市長】

どっちかというのであれば、行政側は何かの制限をかけるほうのキャッチフレーズにしてしまおうんですね、どっちかという。スマホおやすみ運動とかノーテレビ・ノーゲームデーとか。そういう意味でプラスのイメージ、これをやったらどうだみたいなことをつくるというのは、さっきのお手伝いの話も何かできるかもしれませんね。

【松香委員】

1週間に1回は家族の洗濯をすとかそういう、えーっと思うかもしれないけど、家族の洗濯をすくわなっ子といたら、みんな、えーってひっくり返るでしょうけど。でも、そういう何かわかりやすいことで、家庭も巻き込んでいかないと、今学校だけでしょういろいろ問題を、そうじゃないというのは、皆さん感じていることかなと思いますけど。

【市長】

どこでしたっけ、弁当をつくらせているところがありましたね、地域で。お弁当の日か何かをつくって、子どもたちがお弁当をつくって学校に持ってくる。

【松香委員】

それもいいですよ。

【市長】

おそらくいろんな方法もあると思いますし、ぜひ何かこれから考えていくというのはどうですか。

【教育長】

市長さんが言われるように、プラスのことで言っていないといけないと、今、反省ですね。禁止、禁止のことは学校現場というのは非常に好きですので、そういうのは受け入れにくいんだらうなというふうに感じますね。

【松香委員】

禁止すると、このデータから見ると、多分くわなっ子というのはすごく素直で、言われたとおりにやって、学校も楽しい、みんなとも協力して話し合っ、すごく素直な人が育っていると思うけど、やっぱり禁止したら聞くじゃなく、何か違う目標でもうちょっとわかりやすいのをつけるといいのかなと思います。

【市長】

ありがとうございます。

この1番目、この後また続いていく部分もあるんですけども、ありがとうございました。事項の2ですね。これからの本市の教育環境づくりについてを議題といたします。

では、事務局から説明、お願いいたします。

【指導課長】

指導課、野呂です。よろしく申し上げます。

それでは、まず、昨年12月21日に次期学習指導要領の答申が出ております。もとの答申書は非常に分厚いものですので、概要のほうを参考資料とさせていただきます。その参考資料も含めて、少しポイントだけお話しさせていただきます。

まず、学習指導要領につきましては、道徳を皮切りに段階的に導入がされていきます。まず、再来年度から小学校で道徳、教科としての道徳がスタートしていきます。その次に中学校の道徳、その後、小学校の学習指導要領が新教科書に変わりスタートしていく。その年から英語のほうもスタートしていく形になるかと思えます。中学校につきましては、新教科書になって2021年度、平成33年に全て全面実施になっていくこととなります。

その中で、学習指導要領に示されてくるであろう内容が答申にございまして、その中から、今のくわなっ子のポイント、課題も含めてポイントになるところにかかわる部分だけ、かいつまんで示させていただきます。

答申の概要の4ページをご覧ください。

4ページの真ん中あたりに(3)があります。ここに、子どもたち一人一人の豊かな学びの実現に向けた課題ということが出てまいります。そこには、多様な子どもたち、異なる背景を持った子どもたち、それぞれの豊かな学びということで、例えば、桑名であれば特別支援教育であるとか、外国人児童生徒への対応、また、あるいは先ほどお話が出ておりました貧困の問題等もこのことにかかわってくるのかなと思えます。答申のほうでもここのが出されてきますので、まずここをご確認ください。

それから、それ以外のところで、14ページ、15ページをお開きください。

14ページのところから、先ほども話題になりました、英語の話がありましたけれども、言語能力の育成とあって、国語教育の一方で、外国語教育の改善、充実ということで、小学校のほうで今、外国語活動が5年生で英語科に教科化になり、3、4年生で外国語活動が前倒しになり、時間数も小学校で35時間ずつ3年生以上は増えていくというところで、どのような授業の持ち方があるのかなということもこれから大きな課題になってまいります。

また、15ページの中段にございます情報技術を手段として活用する力やプログラミング的思考の育成というところでは、プログラミング教育ということで、小学校から文字入力やデータ保存というところでコンピューターを使った、そのような授業もこれからどんどん推進していかねばならない、それも系統性を持ってということが出てくるかと思えますので、そのためのICT環境整備についてもこれから課題になるかと思えます。

続きまして、18ページをご覧ください。

18ページのところには、学校段階間の接続ということが出てまいります。幼小中高大、職業まで入れていただいておりますが、本市においては、特に小学校教育と中学校教育の接続というあたりで、今、小中一貫教育ということも出てまいりますので、義務教育9年間を通じて、子どもたちに必要な能力、資質を育むためにどのようなことを進めていけばいいのか、また教えていただけたらなと思えます。

それから、22ページに出てまいりますのが、道徳教育についてです。

道徳教育につきましては、考え、議論する道徳の授業への転換ということで、今現在、市内の

研究指定を受けている学校が先進的に既に研究を進めているところです。

このような大きなところでご提案させていただきましたけれども、このような視点に絞らせていただいて、皆様のご協力をいただけたらと思います。

以上でございます。

【市長】

ありがとうございます。

事務局から学習指導要領についての説明がありましたけれども、またこちらにつきましても、皆様のご意見を賜ればというふうに思います。

これ、まず、教育長から、お願いいたします。

【教育長】

これはなかなか大きな問題でございまして、ちょうど東京オリンピック・パラリンピックの年が小学校の全面実施ということで、その後、順次中高へということになるんですけれども、英語教育、それからプログラミング教育と教科としての道徳あたりが目玉だと言われているんですけれども、その根底になるのが、今ちょっと話題になっている国語の言語能力があるので、そこをきちんとやりながら英語にもつなげていかなければいけないんじゃないかなというふうに課題を持っております。

それと、今出ました小中9年間を通して子どもたちを見守っていくという考え方がかなり鮮明に出されてきております。その意味で、私どものほうで小中一貫教育ということが出ているんですけれども、じゃ、問題は小中一貫教育をやったら学力が上がるのか、あるいは生徒たちも非常にコミュニケーション能力が上がるのかとか、あるいは、ほかの面でどういうメリットがあるのかというようなことをしっかりと踏まえていかなければいけないんじゃないかなと。

国の学習指導要領の改訂ということ踏まえて、1つ思うことでございますし、それと、このバックに背景としてあらわれてくるのが、1つはグローバル化の問題だろうというふうに思います。その中で、今、外国のこともありますけれども、ツールとしての英語というのはよくわかるんですけれども、そのためには自分の生き方とか自分の主張というものをしっかり持っていないとやっぱりいけないだろうと。そのグローバル化についての1つの危惧がそこにあると思うことと、それから、もう一つは、情報化の話だろうと、AIの話とか、IoTというんですか、第4次産業革命とか言われていますけれども、前も少し話したように、しっかりしたものを持っていないと、職業もロボットに全部奪われちゃって、人間はどういうふうに生きていくんだとか、どういう部分でということも感じますし、桑名のほうから考えると、そういう情報の部分を日進月歩で進んでいくとなると、ほとんどの人たちが世界へ出ていったり、ほかの都市へ行っちゃって桑名に残ってくれる人が、桑名を支える人をどうやってつくっていけばいいのかと、ちょっと飛躍し過ぎかもしれませんが、非常に危惧しているところでございますので、問題提起ばかりで申し訳ないですけど、そんなようなご意見もいただけるとありがたいなと感じております。

【市長】

ありがとうございます。

ここの最後の部分に、これからやらずにちゃいけないことがあるよねというのを書いていただいていますけれども、このあたり、踏まえても踏まえてなくても構いませんので、学習指導要領の変わっていくことは、これから育っていく子どもたちは、おそらく今の我々とは違う形でというか、違うように育っていくというふうに思いますので、そのあたり、いろいろまたご意見を賜れ

ばというふうに思います。

また、同じ回りでいきますか。

【稲垣委員】

松香さんが入ってくださったのもあり、せっかくなので、個人的には英語教育の可能性をすごく感じてはいますね。別に英語ができたらみんなが外に行くとは、個人的にはあんまり思わずに、算数ができるのと同じぐらいに英語が話せるようになっていくという感覚は、すごくこれからの世界として必要なだろうなと。実際私も、いろんな企業さんの50代とかのリーダーをメインにやっていますが、課題、目標の中に英語って入る人、すごく多いんですよ。50歳の方が今、一生懸命英語を勉強しているわけですよ。それで仕事の成果とかが左右されるような時代になっているのをすごくロスだと個人的には思うので、やっぱり英語教育でやれる部分はすごくあるんじゃないかなというのが1点ですね。

ただ、やっぱりほんとうに国語力とか、何か伝えたいものを持っている必要があって、例えば読書の問題も、私、小学校のときはすごい読書家だったんですね。本が大好きなタイプでよく読んでいたんですけども、今我が家で一番実は本を読んでいるのは夫なんですよ。うち、本がたくさんあるんですが、ほとんど夫が読んでいて、でも、多分うちの夫は小学校時代は、ほとんど読まないタイプなんじゃないかなと思うんですよ。じゃ、何で本を読むかという、やっぱり目的が必要であって、逆に人は目的とか何かが見えれば学ぶだろうし、やることはやると思いますよね。そう考えると、さっき市長が言っていた、ほんとうに中学生とかに可能性、可能性って、やっぱり人が持ってくるんじゃないかなと個人的には思うんですよ。今の情報化の社会だからこそ、情報で子どもたちにやられちゃっているんで、すごい感覚的なフェイス・トゥ・フェイスの、松香さんみたいな人が多分学校に行くだけで、こういうマダムになれるんだという、済みません、多分生き方のサンプルにもなるでしょうし、何かそういうもっとフェイス・トゥ・フェイスの場みたいな、大人がかかわるようなのがほんとうにあつてのやっぱりグローバルとかグローバルというか、何かそういうのがいいかなというのを個人的には思っています。

【市長】

今なかなか情報化ゆえに人と人がみたいな部分が確かにそういうことだろうなというふうに思いますし、何か伝えたいものがあるから言語が必要なんですよ。

【稲垣委員】

そうですね。そうであれば学ぶでしょうし、そのためにこれだけの情報があるということはあるがたいことというふうに思えば、必要な情報もとれる、センスは子どもたち、妙にいいので、その辺は全然とっていきましょう。

【市長】

先日、JAXAのフライトディレクターの山中さんとお話する機会があつて、いろいろとしゃべったんですけども、将来的には、おそらく言語は翻訳の能力がどんどん高くなっているんで、そういうもので何とかなっていくだろうと。しかし、やっぱり伝えようとする思いとか積極性みたいなものは学ばなくちゃいけないので、やっぱり英語をしなくちゃいけないと。ある学校の先生が、小学校で英語は要るんですかとか聞いて、山中さんがそう言っていましたけど。だから、ただ、私もこの英語教育には非常に可能性を感じていますし、日本の子どもたちが、そういう意味では可能性を生かし切るためのツールというふうに僕は考えているので。

【稲垣委員】

私もよくわからないので、逆に聞きたいんですけど、多分日本語で考える思考と、私も中国語ができるというのがあるんですけど、中国語で言うときの自分の思考パターンと多分英語も違ってくると思うんですね。そういう意味で、言語を学ぶということは、もしかしたら思考が広がる助けにもなると言えるのかと思ったり、それは逆に聞いてみたい感じがしています。

【市長】

という流れで、松香委員、お願いします。

【松香委員】

この幾つかあるスケジュールというところにあるんですけど、2018年から小学校英語の先行実施が可能とか書いてあったり、2020年にはよいよ教科になりますよと書いてあったり、その次の年に中学校英語の学習指導要領って、これを全部一遍に私は考えたいんですね。

どうしてかという、小学校英語、翻訳機がどうのというのはすごい高レベルの話ですよ、小学校でやるとか中学校でやるというのは、国民全部がやる英語というのは、ものすごく専門に入ったら翻訳機を使えばいいと思うんですけど、それ以前の出会ったときのほんとうの、あなたと友達になりたいみたいな、その部分というのを国民が全部できるべきだなと私は思っていますね。だから、義務教育に入らなきゃいけないと思うんですけど、今の問題は、小学校で幾ら楽しくやっても中学校がそれをきっちり受けているかという問題があるので、小中連携というのが最も英語教育では大事で、それで、それを考えて私どもが今請け負っているところが神奈川県の大和市というところの全小学校の英語プログラムでいうと、23万人の人口で19校なんですよ、小学校が。それで、中学校が9校で、児童数が1万2,000人で、教員が420人というプログラムをやっていたり、埼玉県の新座市というところも人口は16.3万人で、小学校が17で、中学校が6校。これに比べると、私、よそ者ですから言えるんですけど、たった14万人の人口で27小学校って、尋常でなく多くて、これをどうにかしなきゃいけないと思うんです。

どうしてかという、中学校が9校ならば、中学校区の英語科の先生がヘッドに立って、下に小学校3つずつ、例えば抱えてというふうにやらないと、小学校英語というのはほんとうにちょっとしかやらないんですね、実は。だから、中学校で全てができるための、例えば4技能でいくと聞く、話すしかやらないんですね、小学校は、根本的には。それから、読む、書く。でも、昔は、中学1年なんて聞く、話す、読む、書く、全部やって、しかも完璧に書けなきゃいけないとかやるから、みんな嫌いになっちゃったわけですよ。それを今、小学校で聞く、話すを重点的にやって、それから読む、書くもやるというふうにぐるぐるできますから、ずっとよくなると思うんですけど、でも、本質は中学校にあるので、中学校の英語がものすごく変わらなきゃいけないんですね、これから。さっきの入試のこともそうですけど。

それで、入試で、今英検みたいなものを高校入試のかわりにしていくとか一部にしていくというのを、今の中2からはもう起こるわけですよ、現実に。東京都も今高校入試を英検の2級ぐらいに変えましょうとか、そういうような議論に進んでいるので、そうすると4技能とかをやらなきゃいけないって、そうすると、今の小学校の先生は、まず英語にすごく自信がなくて、それは三重大学の松岡先生によくやっておいてねと言っちゃったんですけど、教育学部から卒業して小学校に来る方は、もうちょっと英語ができたほうがいいのかというのはあるんですけど、でも、小学校の先生は、基本的には学級担任が仕事で英語でないんで、どうにか支援しながらでも、小学校はとにかくまず楽しくやる。楽しくなきゃやらないというのは、みんなほんとうに人間はそうなので、体を動かして、声を出してやるみたいな態度ですよ、まず小学校は。加えて、それに中

学校では少し常識みたいなことで、自分の思っていることはちょっとと言えるかな、書けるかなみたいなところまで持っていくには、大阪府とも仕事をやったんですけど、大阪も今、大阪にいないので言えるんですけど、大阪って学力がすごく低いんですけど、でも、小学校で英語を6年間やらせて、中3までに英検2級と言っているんですよ。これは、公立で言うにはすごいことなので、中3で2級というのは、全員取らせるって豪語するのはすごいことなんですけど、そういうふうに全体のレベルが上がってくるので、桑名市でやるときにも、私としては、派手なことはせず、まず中学校区と小学校区をこういうふうに組み合わせ、私に示してほしいんですね。何かヘッドをつけて、中学校の先生が立ち上がらなきゃいけないと思うけど、中学校の先生が立ち上がるには校長先生がそれを了解していきやいけないんですよ。そうじゃないと会議とかに出席できないんですよ。校長先生がそれをやるには、教育委員会が旗を振らなきゃいけないんですよ。それをやるには、市長さんが旗を振らなきゃいけないんですよ。

だから、そういうことで、小学校英語のスタートと中学校英語というのは、多分中学の先生は2021年度に中学校の学習指導要領が変わるから、それまではまだ何年もあるわよと思っているかもしれないけど、そういう状況ではないですね。小学校英語が変わる以上、中学校は絶対変わらなきゃいけないので、このところをどういうふうになっているか、まだちょっと実態も全然見せていただけていないのでわからないんですけど、私としては、この問題は全部一遍で、それで、中学生にもさっきの夢じゃないですけど、もっと英語をやると何がいいかという、今グローバルな話も出ましたけど、将来はというのは夢がちょっと広がったりとか、それにはやっぱり自分で意見を持たなきゃ何もないなとなったら読書もするでしょうって、そういうふうに全部に影響があるし、具体的に夢も持たせられるので。

ただ、国語、例えば朝読書というのと英語を1週間に3回ぐらい聞かせてねというのは、ぶつかるんですね。そうすると、英語をやっつけてねと、1週間に1回より3回ぐらい聞かせたほうがいいんですよという、じゃ、どこをやめればいいんですかと小学校の先生が怒るんですね。じゃ、朝読書をやめてくださいというともっと怒るんですね。だから、ここら辺の時間調整というか、みんなの合意をとるのはすごく大変なんですけど、小学生の場合は、細切れにやったほうがものすごく成果が上がるんですね。1週間に1回で、時々抜けて2週間に1回とかいうやり方じゃなく、今までのことを、今までやっていた中学校の英語を小学校におろすんじゃなくて、コミュニケーションのための英語というので、今すごく全国的に一番うまくいっているんですね、英語教育の中では小学校が一番うまくいっているんで、ある意味では、すごくうまくいっているんです、いろんなところで。コミュニケーションというのが成立しているのは、小学校ぐらいだとよく言われるぐらい。それにはやっぱり中学校区が、でも、私、桑名をまだわかっていないので、桑名の中学校の英語は、昔とは180度変わっているかというのをまず見せていただいてから、小中の連携を考えないと、ここをたたかないと絶対に物事は成功しないなと思っていますけど。

この問題は全部一体で、早目に仕掛けないと、じゃ、中学校の学習指導要領が変わったからそろそろ英語を変えようかじゃ、あと10年以上かかっちゃいますね。

【市長】

現状はどうなんですか。

【教育長】

今、おっしゃっていた、この前お会いしたときにその話も伺いましたので、早速指導主事に話をしてあるんですけども、松香先生がご想像されているとおりのようですかね。中学校のほう

は、やっぱりちょっと自校中心というんですか、そういうことになっていると思います。

今、小学校のほうは、この学習指導要領の時間数だけでいうと、小学校のほうが大変になる状況なんですよ。今、1週間で5日制ですから30コマあるんですよ、5、6年生ですと。だけど、職員会議等がありますから、水曜日は、6時間目はありませんから29コマなんですよ。ほかの教科を全部入れて、もう29が全部埋まっているんですよ。そうすると、そこへもう1時間英語を増やせということで、上からお達しがあるような感じの感覚なんですよ、現場としては。そうすると、どうするんだと。今、松香先生がおっしゃったとおり、モジュールでやるということで、1日に15分ぐらいずつ3日やれば45分になるので、それを1時間と数えましょうというような形になるかと思うんですけども、その壁が朝読なんですわ。それは、朝読は前のゆとりのときに何とかしないといけないというので、うちの大先生というか遠山大臣は桑名の出身ですから、遠山大臣のときにそういうのを奨励されて、うちが真っ先にやったというような感じで、朝読もかなりの成果を上げてきている。そうすると、朝読でやっておいて、またモジュールでいくのかというのが非常に学校現場にとっては相当プレッシャーがありまして、今からそういう納得をしていただかないといけないことになるんですが、冬場ですと、それで小学校の子たちが帰る時間が20分、30分遅くなるんですよ。そうすると真っ暗になるじゃないかという話も出てくると思いますし。

それと、もう一つは、変な話でいうと教師の多忙感というのがあると思いますから、それもまた余分にやるのかという意識になると困るので、いや、こうやることによって子どもたちに夢ができるし、ほんとうの英語教育がきちんとできるんだよというように納得していただかないといけないと思うので、そうすると、小中一貫というのは非常にメリットがあるんじゃないかなというふうにも考えるんですが、ただ、そのあたりは、学校現場から言うと、ストンと腹に落ちるかどうかというのがありますし、小学校の先生は、基本的には英語に対してはネガティブな感じで、コンプレックスを持っていますので、英語はちょっとやっぱり苦手だというような現場の先生たちが非常に多い、これは事実だと思いますから、そのときに中学校の先生がどうやってサポートできるかと。サポートした中学校の先生のケアを何らかの形でしてあげないといけないなど、そんな仕組みをつくるのが大事かと思いますので、ぜひちょっと松香先生にも、委員さんにも相談させていただきながら進めていきたいなと思っているのが今の現状でございます。

【松香委員】

中学校の先生がちょっと変わられて、コミュニケーションのための英語、例えば英語で英語を教えますというのを常識にして、100%を目指して80%が終わればいいんですけど、この間ちょっと見せていただいたら、まだ桑名の英語の先生は、あんまり英語で英語を教えていないということで、それは全国的から見てすごく低いかなというのがあるので、それは、いわゆるパッシブな授業をしているかなと思うんですね。アクティブにやらせていないかなというのがあるって、中学校の先生が変わったら、今度中学校の先生が小学校の先生にいろいろほんとうは教えて、中学校の先生が小学校の先生を褒めてくれるといいですね。現場同士で仲よくなれないと、これは絶対に成功しないし、もう1つの考えは、今クリルというのがあるって、クリル、CLILなんですけど、コンテンツとランゲージがインテグレートドのようになっているんですけど、コンテンツ・アンド・ランゲージ・インテグレートド・ラーニングというんですけど、内容と言語が一致している学習法といって、理科的なことを英語の時間にやるとか、社会的なことを英語の時間に、算数的なこと、大きな数字の読み方とか、どっちの国は何倍ぐらいの面積があるってとか、そうい

うのを英語でもやるとかって、それだと小学校の先生は入りやすいんですね、その感覚があると。自分の知っていることが役立つんだと、英語はゼロという考えじゃなく、いろんな教科と結びつけたような感じで、英語の歌を音楽の時間にいい発音で歌ってもいいわけですよ。そういうようなことをやって、それを1時間とカウントするというのは、ヨーロッパなどでももちろんやっていて、どうしてかという、時間が足りないからです。みんな競争に、絶対に数学、算数をやらなくていいんですかとなるわけですね。理科の先生、じゃ、理科をやらなくていいんですかとなるので、生活科ができたように、何かあわせてやるという考えもやらないと、小学校は今の時間がもうぎりぎりですよ。それはよく承知しているので、そのクリルの考え方でいくと、すごく小学校の先生はわかりいいというのと、あと、よく言われるのは、もし桑名市が将来タブレット化とかコンピューター化とかできるなら、反転学習といって、家庭で何か言葉の単語とかそういうのか、フレーズとかを覚えてきて、それを学校で使うみたいな、そういう反転学習みたいなのができれば、タブレットとかが配れるようであれば、どこかが、大きな企業さんとかが寄附して下さるとかだったら、そういうようなこともいいのかな、そういう流れにはなっていくと思います。そういう反転学習というか、全部先生が教えるんじゃなく自分で、言葉ってそうですよね、自分である程度戦って覚えなくてできるようにならないので、そういうことも考えていく時代なのかなと思いますけど。

でも、やっぱり何かやろうと思ったら、地味なことをこつこつやらなくちゃいけないので、私としては、小中の先生がまず仲よくしていただいて、それで英語という接点で、小中の、桑名がもうちょっと小学校の数を半分ぐらいにさせていただいて、結びつきが、全然エリアとかわかっていないから言える話で、きっと皆さん、言い分があたりだと思いますけど。どう考えても小学校が多過ぎるので、それだけやるのが大変。ほんとは1つの中学校に1つの小学校か2つの小学校が限度だと思うんですね、こうやってまとまりをつけるには。そういうふうにしていただいて、整理整頓していただいて、リーダーをつけて、小学校の先生も中学校の先生の英語の指導のもとに頑張るとするのが、一番教員同士で理解しやすいと思っています。

【市長】

また小中のかかわりを何とか超えていかななくちゃいけないということだと思います。

【教育長】

よくわかる話で、たまたまタイムリー、ジュニア・サミットが終わって、機運としてはある程度先生方も持っていますし、住民の方とか保護者の方もるので、今やるのが、変な話、今でしょうと思うんですけども、それと、一番やっぱり小中のことを考えるとネックになっているのが、うちでいうと分散進学なんですよ。1つの小学校が全く半分ずつ分かれて違う中学校へ行くというような形があるので。

【松香委員】

どうしてですか。そんなこと、こんなところで今議論することじゃないですね。

【教育長】

そこら辺も工夫しながらやっていくことかと思しますので、今、松香委員がおっしゃっていたことはよくわかりますし、一番頭に残ったのは、褒め合いましょと、そこが一番大事なところかと思しますので、ある意味ちょっと見ていただいて、次へのステップをしていきたいなと感じております。

【市長】

英語のことをいろいろ教えていただけるかと思ったら、実は小中の連携の話だったという、我々としても非常にコペルニクスの転回というか、まさかそっちだったかという、いいご指導をこれからも。

【松香委員】

英語は、実は中学校も大変わりしなきゃいけないし、小学校は何をやっていいかよくわかっていないので、英語で小中連携をやるというのは、みんなわかっていないからすごいチャンスなんです。変な話ですけど、わかっていないからやりやすい。どうしてかという、例えば算数と数学といったら、みんな自分の守るべきことがしっかりわかり過ぎちゃっているから仲よくできないですね、まず。ほかの教科は6年やって3年やるとなったら、ものすごい大げんかになるんですね、その境目とか。だけど、英語は今、すごく流動的ですから、ここを起点にして桑名をまとめ直すというのはいいかなと勝手に考えています。

【市長】

その知見を持ってもらって、小中の部分、取り組んでもらえたらと思います。

【教育長】

これもぜひ参考にさせていただかないといけないと思いますので、それと、できたら保護者の中にもかなりやれる、英語の堪能な人もみえるので、そこを何とか活用できないかなと思って。

【松香委員】

地域で興す英語というのは、すごく皆さんやっていて、結局文科省は、法律は指導要領とかはつくりますけど、実際の実施は各自治体に投げるわけで、そうすると、そこから先は予算がない、何がない、ないない尽くしで、教員は忙しいとなると、やっぱり地域で興していきましようとなつて、地域の中には英語ができる人は掘り出すと結構いるんですね。保護者の方がずっといるんです。ですから、そういう方に積極的に学校教育にかかわっていただくというのも1つの、地域を興すために英語がやりやすい理由かなという。それで、皆さん、何をやっていいかよくわからないから、今がチャンスかなって。

【市長】

むしろそうですね。

チャンスを捉えると。いい方針をいただきましたね。

じゃ、松岡委員、お願いします。

【松岡委員】

まず、松香委員からお話がありましたのでお答えします。

三重大学教育学部では、英語教育コースだけでなく、全員が当然、教養教科で英語の授業を受けるわけですが、全員がTOEICで何点以上とらないと単位が付与されないと、そういうふうにしております。

【松香委員】

何点ですか。

【松岡委員】

それはちょっとこの場では申し上げにくいんですけど、松香委員の要望にお応えするにはそのレベルをもっと上げないといけないのかなというふうに思いますけど、現状でも結構四苦八苦している学生はいますけれども、小学校から英語が導入されるということで、小学校の教員を目指す学生も意識は非常に強く持っている、ということだと思います。

私の話をしますと、私のころの英語というのはやっぱり読解中心でしたよね。

【松香委員】

そうですね。

【松岡委員】

それで、関係代名詞なんかも訳し上げるとか、漢文みたいな感じの勉強をしましたけれども、あれは、我々、仕事柄英語の論文をたくさん読んできましたけれども、それに対しては勉強になっていたと思うんですね。役に立っていたと思うんですね。

【松香委員】

大学教授になる人は必要だったと思います。

【松岡委員】

一方、研究をまとめて発表しようと思うと難しいんですよ。質問されて、それを考えて、その場でぱっと返せるようになるには相当苦労しましたね。我々はキャッチアップの時代だったのでそれでよかったです。これからは発信の時代なので、英語、当然勉強の仕方を変えていかなければいけないというように思いますね。自分で考えたことをそのまま適切な英語で話せると。とにかく伝えられるという、そういうことが必要になると思いますね。

この間、市長さんと立ち話をしたときもちょっと言ったんですけれども、私、ユネスコスクール関係で熊野古道をよく歩くんですけれども、三重大の学生を連れて歩くんですけど、木本高校と連携してやっていて、木本高校生が日本人学生には日本語で説明をして、留学生に英語で説明するんですよ。それをちゃんと予習してくるわけですね。1人で全部は無理なんですけど、ポイントごとに、このポイントの説明は誰それがやると。分担してやると結構説明するんですね。英語で質問されてもちゃんと返しているから立派なものだなという。そういうふうなことがもしかして桑名でもできるのかなと、中学校は中学校の地元の名所旧跡を調べて、それをどんなふうに説明したらいいかって、そういうふうな取り組みをやれば、中学生でも高校生でもできるんじゃないかなと。自分の言葉で話せるようになると。質問があつたら、もしかしたら返せるかもしれないと、そこら辺までやるような、何かそういうような取り組みが1つできるのかなということをお話しさせてもらいました。

あと、プログラミング教育について。

【市長】

どうぞ。

【松岡委員】

プログラム教育につきましては、結構期待しているところがあるんです。それは、現行の学習指導要領を検索して調べるとわかるんですけれども、創造とか工夫という言葉がいっぱい出てきます、いろんな教科で。ところが、小学校、中学校では、算数、数学、理科には創造とか工夫という言葉が出てこないんですよ。理系の創意工夫というのは考えられていない。理科なんかは自然の現象とかを理解するとか、あるいは探求すると、そういうふうな表現にとどまっているんですね。その中でプログラム教育が入ってくると、これは論理的に考えて、自分のやりたいことを実現すると、そういうふうな論理的な思考ができるようになると思って非常に期待をしているところです。おそらく画面の中か、あるいは簡単なロボットを自分でプログラムして動かすという、そういうふうな取り組みになってくるのかなと思うんですけれども、そういう活動は幾つかの学校で課外活動等でされています。三重大学教育学部附属小学校でもコンピューター部かな、

それでやっていて、それでロボットを動かすんですけど、ほんとうに夢中になってやって、中にはかなり高いレベルに入っていくような児童もいますので、そういった形でプログラム教育が展開されていくんじゃないかなというふうに期待しています。

【松香委員】

一言いいですか。

【市長】

どうぞ、松香委員。

【松香委員】

さっき大学生が熊野古道で、とてもいいことだと思うんですね、そういう体験を増やして実際に使う。でも、小学生って、まだ子どもでなかなか難しいんですね。監督が必要。だから、ぜひ、もしそういうジュニア・サミットで何かやったときの経験も生かして、高校生が親分になって、中学生と小学生を引き連れて何かやる、何か行事的なことをやるなら、教育委員会が小中だけを統括しているってよくわかっているんですけど、でも高校生を市の中だから一緒に何かやってもらうと、高校生が一番馬力があるなと私は思っているんです。

【市長】

先日もポストジュニア・サミットのイベントで、まさに高校生が集まって、桑名の魅力発信についていろいろ言ってくれたんですけども、自分らの視点で桑名のいいところを紹介したいということを言っていたんです、高校生が。すばらしいなと思っていて、それを多分英語でやれるように、英語で桑名の魅力が発信できるようになる、そういう子を育てるといのは確かにいいですよ。

【教育長】

最近、県立さんもある程度、小中、義務教育のほうと連携しながらという機運というんですかね、特に今言わせていただいたアクティブラーニングという考え方で、できるだけ小学校や中学校の授業の中にそんなものがあるんじゃないかということで、連携しましょうと。特に、今も実際、例えば桑名工業の生徒さんたちが、隣の七和小学校の子どもたちと一緒にやっていて、最初芋掘りぐらいから始まったんですけど、最近ロボットの話しなんかもやっていただいていることでもありますし、かなり前々から伝統的に連携もしていただいているので、そんなものを広げながら、今おっしゃっていただいたようなところをアドバイスしていただければと思うんですけど。

ただ、ジョイントするのをやっぱり教育委員会がその辺のお世話をしないといけないなと思いますので、ちょうど伊藤委員、そのあたりも高校のほうともつながってはいただいているので、連携していただきながら進められたらなと。ただ、急には難しいですので、徐々に。

【松香委員】

例えば、高校生が小学校の英語の授業に行って、高校生が教えたりすると、小学生はすごいうれしいんですね。身近なモデルが見られるので。外国人が来ると英語がしゃべれるのは当たり前だ、外人だからと思っていて、子どもってそういうところがおもしろくて、でも、高校生は大好きなんです。

【教育長】

それと、すごく子どもというのは憧れになるというか、小学生は高校生、例えば幼稚園は中学生、中学生はキャリア教育で幼稚園へ行ってきているんですけども、ものすごく幼稚園の子がなつくんですよ。そんなこともあるので、そのあたりもすごく効果があるんじゃないかなと思

いますね。

【松岡委員】

この間のジュニア・サミットの場合は小中高といて、それで、全国大会のスピーチコンテストに出たという高校生が非常にきれいな英語でスピーチを見せてくれたんですよ。あれは、小学生はわからなかったと思うんですけど、非常にインパクトを与えたと思いますね。

【教育長】

憧れますわね。

【松香委員】

でも、小中高の子が3人並んでスピーチとかするととってもかわいいですよ。そういうふう to 発想を拡げて、何かお互いにやり合うとか、質問するとかというのを見せる。高校生が何かをやって立派だなというのは、小学生にちょっと遠いんですね。だから、やっぱり高校生が学校に来て一緒に英語活動で何か活動をして遊んでくれるとか、そういう英語だけしかしゃべらないという約束で来てくれるとか、そういうのがすごくよくて、何かそういう大会のときも、小中高の勝手がわかるような、同じような題で小中高がやるとか、そういうふう to 発展すると、我慢して聞いているというだけじゃないのいいかな、今風かなと思いますけれども。

【市長】

あと、もう1つ、プログラミング教育のこともありましたよね。学校現場はどうやって捉えているんですか。

【教育長】

今おっしゃったように、この趣旨はよくわかっているんです。例えば、タブレットは誰でも入れたいということもあるんですけども、ただ、今言われたように、できるだけ子どもたちが、非常に堪能な子と全くという子と、やっぱりあるんですよ。その中でどういうふう to 教えていくかというのが非常に苦慮している状況じゃないかと思うんですけどね。

それと、やっぱり中学校の技術科の先生は非常に堪能なんですよ。ところが、小学校の先生はそこまでいかないので、ほんとうにまだまだ、せっかくのコンピューターを使いこなしているのかなというところと、一番活用がされにくいなと思っていますのは、いつか電子黒板なんかを国がやりましたよね。あれも一過性のもので、桑名ですとワンフロアに1台なんです、置いてあるのが。そうすると、ある先生が使っていると、もうほかの先生は全然使えないという状況で、どうしてもまだまだ進展していない。それから、案外、変な話だけど、若い先生たちが多くなってきたので、すごくその辺については精通している先生方がたくさんいるんですけども、そこまでちょっと使えていない。あと、LAN整備がしっかりまだできていない部分があるので、その部屋の中だったらできるんですよ。でも、持ち出してやるわけにはいかないので、どうしても限られた内容のものしかできないというのが今の現状なんですよ。

【市長】

でも、プログラミング教育はどうやって、教室でやるんですか。これ、どうやってやるの。コンピューター室でやるのかな。

【教育長】

プログラム教育はそうですね。

ただ、今の話で、ほかへ行って、そこで入力しながらプレゼンするとかという形にはなってくるとは思いますので、そのあたりが、これからどういうふう to 整備していくかというのも1つ問

題ですけれども、ただ、大きな費用が要りますので、だから、それを上手にやっぱりやっていくべきかなと思いますので。

【松香委員】

私も1回、中学校の英語の先生に調べ学習みたいなのを提案したらすごい反対を受けたけど、絶対やってみてくださいと言ったら、学校にはコンピューターがこれしかなくて、使う日程がいっぱいで、どうのこうのってすごい反対を受けたけど、やってもらったら、子どもたちは、コンピューターのある家に行ったりとかいろいろ助け合って、すごく上手にやったんですね。だから、先生よりか子どもたちはすごい上手ですね、コンピューターがね。

【教育長】

子どもたちは、確におっしゃるとおり、もう全然はるか向こうに行っていますね。ただ、立ち上がるのが遅いんです、今の学校のコンピューターは。家で持っている子はいいんだけど、45分の授業の中だと、ちょっとその辺の勝手の悪さはあるんですよ。それでも子どもたちがすごい能力を持っている子たちもいますので、それで何か裏わぎをいっぱい知っているのも、先生よりもずっといろんなものを。

【松香委員】

すごいですよね。

【稲垣委員】

それこそアクティブラーニングの場にしちゃえばいいので。

【教育長】

なりますね。そういう子たちは一番、逆にリーダーになってやってもらってもいいですけど。

【松岡委員】

小学生向けのプログラミング、教育用のソフトというのはいろいろ出てきていますので、何かマウスでちょんちょんとやるだけでプログラムが組めちゃうので、文字でやっていくと、それは子どもたち、普通できませんけど、そういうゲーム感覚でつくれちゃうものがあるので。

【松香委員】

そういうのは予算化しているんですか、市長さんは。

【市長】

今、予算はプログラミングのところまで出ていないんじゃないですか。

【教育長】

ないですね。ソフトは少し買っていただくようになっています。

【市長】

それぐらいしか、だからできていないんですよ。でも、じゃ、そこはこれからより力を入れていかないといけないね。物づくりのまちと言っているのであれば、おそらくそういう経験が、その子どもたちが多分次の世代のこのまちの物づくりなどを担っていつてくれるところもあるでしょうしね。

【松岡委員】

それは大きいと思います。

【市長】

アプリを開発する中学生とか、昔よくニュースになっていましたよね。最近ニュースにならないくらい普通になったかもしれませんね。

【松香委員】

そうですね。すごいですよ、子どもたちはね。

【市長】

じゃ、そのプログラミング教育をしっかりと取り組めるように頑張りたいと思います。

【松香委員】

それに電子黒板もぜひ1教室に1台ずつお願いします。

【市長】

電子黒板問題。

【教育長】

よろしくお願いします。

【松香委員】

やっぱりスクリーンがないって、黒板だけって、江戸時代ですよ。

【教育長】

明治ぐらいかと思っていました。

【松香委員】

江戸時代もあったらしいですよ、黒板。

【市長】

伊藤委員、お願いします。

【伊藤委員】

私、前も言ったかもわからないけど、文科省がこういうふうにしなさいと考えているときにもうしないと遅いですよ、逆に言う。もうこれを2020年からやり出すともう遅れているんですね、現実。ほんとう、さっきのプログラムでも一緒ですけど、コンピューターをそろえたころにはもう古い機械だとかね、そういう点では、機械というのはほんとうに恐いですよね。だから、原型でやれるシステムをやっぱり考えていかないと。何でもそうなんですけど、文科省が審議会で審議しているときが一番大事、そのときがその時代に一番大事で、大体誰も10年先のことってほとんどわからないじゃないですか。やっぱりそういう点からいくと、もう話題になったときに変えていくという。僕が桑名工業高校にいたときは、たまたま僕が全国の研究会の事務局だったから、文科省とよく話ができたので、もう世間が発表する前に全部やっていたから、先ほどの七和小学校との、あんなものも、やるようになった。

結局インターンシップでもデュアルでも、もうその前にやっていた。そのときにやっているから世間が後から、もうその学校が嫌になったなというときに世間がやり出すから、もうやめるわけにはいかなかった。そういうことが、僕はこういうことがものすごく必要だと思うんです。ただ、全部こうやって言っているけど、一番日本人が過ちを犯しているのは、偉そうに言うけど、これをやったら全てが解決するみたいに思うところが間違いなんです。

【松香委員】

そういうことはないでしょうね。

【伊藤委員】

ところが、極論を言う人が必ずいるじゃないですか。これも1つの、ほんの一部だという認識が、やっぱりそれをしてやらやっけていかないといけないというふうになるんだけど、これをして、ほんとう解決、何もできてないじゃないかと言われるようなことでは、またしぼんでしまう。

それで、やらされ感だけが残ってしまうということになってしまうので、僕は、やっぱりそういうところをもう少し、絶対やらないといけないということなんだけど、それでもなぜやらないといけないかということ。

先ほど職業がという話があったじゃないですか。僕は、2つの高校で学校関係者評価委員をやっているんで、両方とも最初に就任したときに、桑名市の教育委員会のときも言わせてもらって、今回のビジョンにもちょっと入れてもらっているけど、なぜ学ぶのかという問いに、まずわかっているかどうか。

だから、僕はいろんなところでそうやって言うんですけど、僕は自分の中では、なぜ学ぶのかというと、自分が将来をつくっていくから学ばないといけないと思っているんですよ。人がつくってくれるから学ばないじゃなく、自分がつくっていくために学ばないといけないという、僕は意識がある。だから、それこそ今、稲垣さんが、ご主人の例を言われましたけど、私も小学校のとき、本を全然読んでいない。だから、今、反対に本を読むことを一生懸命やっているという。だから、トータルでは負けなくらい読めるようになってきたかなとなるし、それはなぜかということ、なぜ今学ばないといけないかということ自分をの中に落とし込んだところがあるからやっぱり学んでいる。日本の人が進学、進学というようなこと、それも1つなんだけど、その上になぜ学ぶのかという、それを簡単に、あなたが幸せになるためということじゃなくて、世の中をつくっていくためにあなたが学ばないといけない世の中ができないよという、それが僕はものすごく大事な気がするんですよ。政治家の皆さんがいろんなことを言われるけど、一生懸命世の中のためのことを思って、相反することを言うかもしれないけど、それでも一生懸命になってみえるし。

先生方もそういう気持ちはあるので、大いにそれを出して行ってほしいですよ、あるんですよ。ところが、目の前の仕事が、そういう点では、さっきもちょっと出てきたけど、こういうことをやるにしても何にしても、先生方がいかに余裕を持って考えられるか、時間が欲しいなというのは、これは私たちの時代より、自分が校長をしていたときも、よくこんなに仕事を増やしたな、なんて反省していましたが、やっぱりどんどん増えていっている。誰も捨てられないからしょうがないんだけど、それでも捨てる場所は捨てなきゃならんだろうし、その辺が非常に難しいんですけどね。やっぱり何とか先生や家庭もそうなんです、家庭も子どもと読書を一緒にしようとか、いろんなことがなかなかできないのは忙しいからということの一言で片づく。やっぱりそこにゆとりがない、ものすごい結果を早く求め過ぎて。

だから、こういうこともみんな一緒なんです。僕はやるべきだと思うけれども、それですぐ結果を求めたら、誰が大変かということ、そこで学んでいる子と、そこで教えている先生が大変になって、やらなきゃいけないからやっていると、結局は無駄な金をつぎ込むようになる。

だから、昔でもコンピューターが大事、さっきも言われたように、スクリーンのためになっても、工夫すればみんなが使おうと思ったらできるんですね。それでも、やっぱりそれは時間がないからなかなか。それで、ある高校でも、私学でそれを全部使わせているけど、そのおかげで準備がものすごい時間がかかるようになった、帰る時間が毎日遅くなるという。全部自分でつくらなくてはならなくなったら大変になってくるという。その辺をうまく合わせていかないと難しい。だから、先生の気持ちに余裕が持てる、まずは。いろんなことを言っているけど、企業でもブラック企業と言われるところは、大体は気持ちに余裕がない、それで、自分がやらされ感だけが残っている。下からの意見がなかなか上へ上へ上がっていかないところほどブラック企業で、大体トップダウンのところブラック企業になっている。今学校がそれになりつつあるし、だか

ら、その辺は難しいなという気はする、年齢が若くなってきているからね。そういう点では、非常に危惧するところはあるんですけど。

そんなちょっと大きく言いましたけど、一応そんなところですよ。

【松香委員】

一言いいですか。

【市長】

はい。

【松香委員】

私、よく、松香さんの言うことを聞いていけば、みんなが英語だけでできればいいですねとかよく言われますけど、私、そんなことは全然考えていなくて、例えば韓国という国は、ものすごく英語をやったんですね。小学校の先生を奮い立たせ、それから母子で留学して、夫を韓国に置いて仕送りだけしてもらってという人は10万人いるわけなんですね、韓国は。それで、ものすごくやった結果、じゃ、韓国国民はほんとうに幸せになったかということをよく考えなきゃいけないと思うんですね。英語ができるようになったのはすごくできるようになりました。じゃ、英語ができるようになった韓国国民はより幸せになったかということをよく考えなきゃいけないで、私たちが何のために英語教育をもっと推進して、日本の国民はどうなりたいかというのはすごく考えなきゃいけないし、基本の基本は、日本人は日本語ができるということが一番威張れることですから、ずっとこの文化を持っているということが一番大事なことですから、それはどこらぐらいの兼ね合いで、どのくらいのお金をかけて、また、今、伊藤委員がおっしゃったことで、昔、LL教室というのがあって、もう全部ごみになったんですね。だから、そんなことも考えなければいけないし、やっぱり何が自分たち、日本の国のことは自分たちでどうしたらほんとうに幸せになって、どこら辺を狙っていくのかというのは、すごくよく考えなきゃいけないことが、韓国の例にあると思います。

【市長】

ほんとうになぜ学ぶかのことですね。しっかりと自分を含めた周りの人たちを幸せにするために、おそらく学ぶわけですから。そこをしっかりと考えた教育をしていかないと。単にこれだけあればいいよみたいなことじゃないということですね。

あと、結構さっきもちょっと思ったんですけど、やめることに抵抗があるんですよ、皆さん。変えることというよりやめることに抵抗があるんだと最近思っていて、うちの、市役所の職場でもそうだし、おそらく学校現場でもそうで、マネジメントということは何をやめるか決めるということだと思んですけど、意外とやっぱりそこが引きずられるのかなという感じが結構あって、何かやるのって、簡単というのも変ですけども、あれやろう、あれやろうというんだけど、それなのに何かやめなくちゃいけないで、何をやめるという大きな決断はやっぱりいろいろしていかなくちゃいけないだろうと、これは私に対しても、自分でも思うんですけども。

【伊藤委員】

ほんとうにやめるのは下手なんですけど、なぜ下手かということ、新しい提案がないからやめられないんですよ、簡単なことなんです。自分で新しいことをやりたい人は絶対やめます、やめないと大変ですから。だから、やっぱりそこを生かせる学校現場にしていけないといけないし、役所でも一緒ですけど、提案して、それが生かせる職場でないと、もう言われることをやっていたら、それでいいや、失敗しても、今までのことをやっていたら失敗しても怒られない。でも、自

分がやったことで間違えると怒られるから、それを言うのはもうやめようかとなったら、やっぱり停滞してしまうので、学校なんかは特に、今の子どもに合った形でやっていかないと、過去がこうだったからということでやっても難しい。特に子どもの時代への適応が早過ぎて、大人の適応が遅れているからね。

【教育長】

そのことをよく勘案して、だけど、提案してやめていくというのもそのとおりだと思いますけれども、やっぱりスクラップ・アンド・ビルドというより、スクラップをしないことにはそのエリアができないので、提案は割と先生たちも持っている、でも、勇気がないと。それで、スクラップをするのはやっぱり校長さんであったり、教育委員会であったりするのです、それは大胆にスクラップしておいて、そういう考え方ができるような余裕を、それこそ気持ちの余裕をつくっていかないといけないのかなというふうに、簡単じゃないと思いますけれども、すごく感じさせていただきました。

もう一つは、今お話が出ていましたけれども、やっぱり保護者の方々と一緒に、当然地域の方々ともということになるんですけれども、特に保護者の方々と一緒に歩むことが必要だろうと。どうも、今の現場を見ると、保護者と学校があって、真ん中に子どもがいたらいいんですけれども、どこか子どもが行っちゃって、保護者と学校だけとなっちゃうときもありますし、そのときに、学校の先生、自分もそういう傾向があったなと反省している話ですけれども、どうも外部からいろいろ入ってきてもらうことに対して、すごく抵抗があるように思うんですよね。よく理解してもらっているPTAの役員の方々だったらいいんですけども、もうその保護者の方々が20人、30人と入ってきてもらうと、ちょっとというところがあるので、ほんとうは協力してやっていくことが次へつながるんじゃないかなと思いますし、この前も皆さんとの話の中でも言ったけど、やっぱりそれと、最近の親御さんは仕事があるので、子どものために、有休とか休みをとるのはできないと。自分の仕事の中の余力のところでは学校へ、だから、参観日なんかだと行きますよと、だけれども、ボランティアで学校のためにやるために休みをとってというまでの人たちがないので、やっぱり全国的に何か、桑名市から発信していただければあれですけれども、やっぱり育ボスというのか、そういう働き方のことを少し、それぞれ考えていって、子どものためにこの時間はある程度提供してもいいんだというような考え方に少しは切りかえていかないと。

そのためには、少し飛ぶんですけれども、今ボランティアでやっていただいている方もたくさんみえるので、ちょうどクリエイティブスクールという形で、今予算も組んでいただいているんですけれども、やっぱり本格的にコミュニティースクールという形に踏み込んでいって、そこに地域のほうの中の人たちをまとめたり、保護者をまとめながら、学校、要するに簡単に言うと、学校応援隊ですよね。そういうようなものをそれぞれ地域に、今おっしゃったように中学校区ぐらいの中につくっていけるような仕組みを今後つくれたらというのを1つ考えているところなんですけどね。そんな思いを持っているんですけれども。

【市長】

やっぱりかかわりたいという地域の方も保護者の方もいるにはいるんですよね。何だっけ、この間もおやじの会でしたっけね。大山田東のおやじの会の人たちとか、結構活発に、男性ばかりで、これが老後につながるとか、そんな思いも持ってやってもらって、これ、ほんとうにいいことだなと思うんです。いかにそういう方を、先生たちは抵抗感なく中に入れられるかということなんですよね。

【教育長】

学校の中でそういう地域交流室みたいなものを、そこにある程度の誰かが常駐ではないですけど、ちょいちょい来てくれて、それで、今度どんな行事をやるのかとかというようなことを学校側と話し合いながら進めていけるような、そんな形ができると非常にありがたいと思うんですけどね。

【市長】

今、小中一貫校を何とか整備していきたいという思いを持っていますけど、そのとき、単に小中の縦割りを壊して学校をつくれということじゃないと思うんですよ。何かそこが地域の図書館であって、地域の公民館であって、そこが役場でもいいんですよ。何か学校って聖域感があって、学校は生徒と先生しか入れない場所だみたいな雰囲気が学校の先生らにおそらくあるんですよ。僕の視点から見るとそんなことは全然なくて、1つの単なる公共施設なので、どんどん使ってもらったらいいし、使ってもらわないと、むしろ僕らとしては非効率だということくらいに見えているんですけども。だから、交流室というよりも、多分おそらくもっと抜本的に変わるんだと思いますけれどもね。

【教育長】

学校の教師側の抵抗感みたいなものを、ちょっとハードルを下げていくというか、それをやりながら、そのためにはやっぱり、こんなことをやると子どもたちのためになるよと、地域とつながると、結局自分たちを応援してくれるんだなというのを体感してもらわないことにはやっぱりいけないので、それを納得というか、いろいろ話をしながら、やっぱり今の1つのツールとして英語を使わせてもらうというのはなんですけれども、1つの切り口としてはありがたいのかなと聞かせてもらったんですけどね。

【市長】

小中の壁も取っ払えるし、それで地域と学校の壁も取っ払えるかもしれないというね。

【教育長】

今言われたように、それで全てが解決するというわけにはいかないですね。

【伊藤委員】

僕は、開放するというのは、四日市で校長をしているときに、県立図書館の本を学校で借りられるようにした。それで、自分の学校の本を住民の人も借りられると、それはコンビニで返してもらったらいいと。そういうシステムをつくって、これもなかなか利用者がなかったけど、それでも月に2、3人は来ていた、地域の人が。それだけで終わるといけないので、僕が特に県教委にいるときに、生涯学習課だったので、高校を地域の人の学びの場にしないといけないという指示も受けていたので、講座をいっぱい設けて、生徒も地域の人と同じ学ぶ講座、事前に申し込んで。それを年に2回ぐらいしていた。それで、やっぱりそういうのを積み重ねていかないと、急には大変だから。それで、悪いことをする人が入ってきたら、入ってきたときもある。それでも、周りの大人はすぐ、あの人、おかしいといってすぐ気づいてくれる。だから、そんなに、僕の経験からいくと、もっとオープンにしてもいい。

【市長】

池田小事件ぐらいから変なんですよね。変と言うとちょっとあれかもしれないけど、何か門扉をつけるとか、おそらく逆なんですよね。おそらく人が人を助けるんですよ。

【教育長】

あれからは大分変わりました。

【市長】

今日はいろいろまだ時間はあるんですよね。まだある、時間、大丈夫。

いろいろまだ話し足りない方たちも、委員もおられると思いますけど、いかがですか。まだ、今議論も白熱してきましたけど。

【松香委員】

いえ、もう十分言わせていただきました。あとは予算だけ。

【市長】

はい、しっかりと。

【松香委員】

皆さんの説得なりが、これから先が大変だと思いますけど。

【市長】

稲垣委員、どうですか。

【稲垣委員】

1つ、地域ですごく気になるのは、多分地域というのと、どうしても年配の人が、学校に協力すると、かかわるといって、そういうイメージがどうしてもあると思うんです。何か特に桑名ってあるのかなって、土地柄、思っちゃうんですよね。実際、今現実直面しているのは、例えば若いママとかパパとかが、そうやっておやじの会とかできればいいですけど、やっぱり人って、自分の子どもが卒業すると、どこか自分も卒業するという感覚になってきますよね。だから、すごく難しいなという。

例えば、うちも今、PTA会長とか全然役員って、ほんとうに決まらないとか、そういう感じもすごくしていますし。なので、やっぱり、じゃ、何でそうなっちゃうのかなと見たときに、お母さんとかお父さんの不安感といっちゃいましょうか、地域と絡むメリットというのを多分全然感じていないんだと思うんですよね。だから、学校と絡むメリットなんてもちろんないという。

【松香委員】

地域と絡まないと、これから崩壊してしまうということですよ、一言でいえば、地域がね。

【稲垣委員】

というニュアンスをどうやって。

【松香委員】

危機感を持たないと。

【稲垣委員】

その危機感は、多分全然出せていないでしょうし、感じてもない。

【松香委員】

というか、日本人は、そういう地域で何か支えるのが下手だと思うんですね。すごく遠慮したり、変に。じゃ、ちょっとこの子たちをこのグループ、見てくださいというのと、私、何か間違ったことを教えたらしらどうしようみたいな変な遠慮とか、学校の先生にこんなことをしていいのか、許可がないからやらないわとか、変に引くの、今度PTAとか引き受けると、ものすごい仕事が降ってきて、そういうところがすごく下手。それで、やっぱりそこら辺の意識改革をして、地域を支えるんだというふうにしていかないと、ほんとうにこれからの日本はいろんな地域が崩壊していくかなと思いますけど。

【稲垣委員】

ほんとう、それはありますよね。だから、妙に不安感とか自信のなさ感、親の、親世代の。これは絶対子どもに影響しているわけで、だから、やっぱり子どもの何となく刹那的な、今がいいからいいかな、俺たち、どうせ大した力がないしみたいなものにもちょっとつながっているように思えたりもするし、何かそれは、答えはないですけど。

【教育長】

ただ、思うのは、そうやって不安感を持っているのはよくわかるんですよ。だけど、来てみると、みんな、私も自分がPTAの役員していたときのメンバーが今でもまだつながっているんですけど、そういう形でやっていくと、みんなですべての1つのことをやり遂げるといえるのは、親のメンバーになると、こんなことなんだなというのがわかってくるので、今も松香委員がおっしゃったように、ちょっと下手なんだというのは確かに思います。まず、下手だからやらないんじゃないかと、まずやってみて、みんなですべてつながれるというような経験を持つとどんどんいけるんじゃないかと。

【稲垣委員】

ただ、それって、多分教育長も先生だから、要は、誰がリーダーシップをとるかということなんですよね。親も親の中でとりづらく、先生も多分多忙で、校長先生あたりが一番ストレートなんでしょうけれども、忙しくて、あと、お任せしますよというふうな乗りになるので、実は、リーダーシップ不在の中で事が進むので、すごいぐちゃぐちゃするというのが個人的な思いですね。

【松香委員】

個人が確立するアメリカのボランティアシステムって、私、3年間小学校でボランティアとかをやったんですけど、全部個人の責任なんです。だから、個人がやっぱり育たないといけなくて、誰が何と言おうと、じゃ、給食の時間にお手伝いをしますと、パパとかママとか、来るんですね。そうすると、多分日本では、給食の時間は、じゃ、子どもが配膳して子どもが何とかしてやらなきゃいけないって学校にもものすごい規則があって、そんなのに親が手を出しちゃいけないというふうに、何かどこかがきちっと決まっていて、それで遠慮するんじゃないですか。でも、アメリカの子って、もっと乱暴者が多いから、いろんなところにこぼしたりとか何かするから、親がやると実は助かるんですね、1年生とか。そういうところが、自分が助けているんだから、自分はこれをやっていいんだという個人が確立しているというのをもっと日本人は見習わなきゃいけないかと思うんです。そこが変に遠慮して、変に命令を待っているから、それで誰のせいになるかしらとか、責任問題とかやるから、親は委縮しちゃってやらないのかなと思うんです。何か間違っただけを教えて、この算数の指導をしていただいたら、日本の親は、間違っただけはどうしようってなるんじゃないですか。そこら辺がすごく、じゃ、Aさんの親が間違えたらしいから、じゃ、僕がちょっと直しておいたよって、そういうふうに平気で言うという間柄というか、そこら辺がすごくさばけていて。

お金も日本のPTAって、何で、私もアメリカから帰ってきたときはほんとうに嫌で、PTAって会議が長くて長くて、何か誕生会とかやると、最後の1円が合うまで何回もやって、私なんか、済みません、20円足せばいいですか、帰っていいですかと言いたくなるぐらいのこと、変なところがきっちりしていて、アメリカの人は自分が出したいお金は、じゃ、持ち寄りですってしようというのとぱっと持ち寄って。

【稲垣委員】

だから、寄附という感覚がもっとあればいいと思うんです。与えるという場が実はなさ過ぎ

るので、与えたいけどどう与えていいのかと思うので、ほんとうに個人的には寄附という制度があったら。

【松香委員】

それはいいんじゃないんですか。市長さんに寄附というホームページをつくってもらって。

【市長】

ありがたいです。

【稲垣委員】

学校で袋のぼろぼろを見ると、もう自腹でいいから払いたいと思っちゃうぐらい、その受け皿がないんですよ。

【松香委員】

それで、自分の自腹で替えたら目立ったら非難されるんじゃないかとか、また親も考えるわけでしょう、自分だけが。でも、アメリカの親とかは、自分がいいと思ってやったんだから、他人が何と言おうと、それはいいことはいいんだというのが、すごい自己が確立しているというのはあると思いますね。それはすごく大事な事かなと思いますけど。

【市長】

寄附はいいですね、学校ごととか。例えば、PTAで活動はできないけれども、学校に何か貢献したいみたいな人とかは、じゃ、お金でとかね、いろいろあると思いますし。

そこは受けられないのかな。

【教育長】

なかなか、どうですかね。

【稲垣委員】

受けられなかったと思います。

【伊藤委員】

差ができるといけないので、A校とB校と。

【教育長】

地域差が出ちゃうので。

【伊藤委員】

それを行政のほうで、ないところは支援してやるぐらいの、市長にちょっとあれがあると、まず、最初は走り出す。最初、走り出さない。ズーっとって、市長、考えたらあかんよ。ちょっと起爆剤だという意識。そういうふうにしていかないと、何でも起爆剤は要るもんね。

【教育長】

もともと小学校にしても中学校にしても、地域の人々の寄附で建ったんですね。

【市長】

もともとはそうですね。

【松香委員】

あと、日本人の悪いことは、裏で何か言うことですよ。それをなくさないと、表では仲よくやっているみたいにして、裏になって、あの人はどうのこうのと言われることを考えるから日本人は動けないんだと思って。

【市長】

それは、多分地域でやる難しさなんですよ、だからね。

【伊藤委員】

その子の成績がよかったり、悪いことをしても怒られなかったりすると、もう火がついてくる。

【教育長】

普通であってもそういうふうを考えちゃうんですね。

【伊藤委員】

やっぱり心の問題で、心豊かにせんと。

【松香委員】

そういうところを変えていくというのはいいのかもしれないですね。

【稲垣委員】

なるべくそういうおもしろい、ほんとうにさっき松香さんが言ったけど、創造的な発想をこの場もつくっていかないと、生まれませんよね、その先。

【教育長】

まず、来てもらって一緒に何かやっていくというのが大事かなと思いますので、やっぱり先生たちがどうしても来てもらうことに対してのちょっと抵抗感があるというところがまずあれかなと思うんですけどね。

【市長】

スモールサクセスじゃないけど、ちょっとずつ何かこんなのをうちでもやれたとか、何かそういうのがどんどん出てくると、多分できると思うんですよ。突然できないというのはまさにそうだと思うので。

【松香委員】

授業公開日にきちっと準備して、それを親に見せるとかも大事ですけど、アメリカの小学校でしょっちゅう親が行くのは、例えばタレントショーとかやって、子どもが何か学級会みたいなのでふざけたりするときも親が見に来るし、何かちょっと Show And Tellとか朗読みたいなのをやったりして、しょっちゅうこれに来てください、あれに来てくださいって、そういうきっちりしたのじゃなくて、普通に、ふだん着で来るという習慣づけがあって、そのときにみんなで褒め合っていると思います。

【松岡委員】

いついつこういうことをやるのでお手伝いしてくださいというようなやり方もきっかけになるかもしれませんし、もっと簡単に、明日午前中都合がつくのでちょっとお伺いしますと、そんなフランクな雰囲気をつくれるといいですね、学校側も、あるいは保護者の側もですね。そうすると、結構やってもいいよという人が出てくるんじゃないですか。

【教育長】

今は教頭先生が取りまとめ役をやっているんです、それぞれの学校で。今、予算をやってもらってクリエイティブスクールもそうやっているんだけど、教頭先生が、読み聞かせをやるときに、10人の人を集めるわけですね。一応登録はしてもらっているんですけど、来てもらうという形で、やっぱりそうじゃなくて、そういう東ねる地域のコーディネーターみたいな人がいて、それで、その人たちがちょっと今度こういう行事が学校であるそうだから、5人ばかり出てくれないかというような形でやっていただくと非常にありがたい。そういうコミュニティースクールというような形ができないかなと。

【松香委員】

朗読を頼んだら、朗読を頼んだ人の1人を東ねる人にして、違うことをやったら、またその人の、学校のピクニックをやったら学校のピクニックを東ねる人という、東ねる人がいっぱいいるわけなんです。それで、その人がそのときやったら終わりなんですけど、そういうふうにして、東ねる人をいっぱいつくらないと、それは教頭先生は忙しくてたまらない。

【教育長】

東ねる総会みたいな、東ねる人たちの横のつながりをつくっておくと、非常にそれがうまくいって、同じ時間にセッティングされると、ちょっとごめんなさいねというのも教頭さんが言うわけなので、そうじゃなくて、やっぱりそういういろんなやっていただいていることに対して、調整してできるような横のつながりができていると非常に回りやすいと思いますね。

【松香委員】

日本とアメリカと違うのでしょがないですけど、PTAの会というのは、夜、お父さんたちも来られるように夜やるんですけど、こういうことを東ねたい人という、みんな手を挙げて、「I'll do that. I'll do that.」って全部決まってくわけなんです、自分から。日本のPTAの役員会に1回出て、もう絶対に委員に指されないようにみんな下を向いて、もう我慢大会で、我慢し切れない人がなったりするので、あれをどうにか変えないと、もう東ねてほしいことをいっぱいあつて、じゃ、読書の本をきちっと直す人とかって、ちっちゃい仕事なんですけど、東ねたい人というのをわーっと発表するんです。そうすると、みんな学級でも、それならできるとか、1週間に1回、1時間来て砂場をきれいすればいいならやるとか、食器をそろえるだけなら行くわって、そういうふうにしてすごくやっていたので、私なんか外国人ですから、最初行ったときなんか、すごい簡単な役しかいつも来ないんですけど、あの人はわからないらしいと思うらしくて、でも、そうやってやってだんだん深い入りして、私はものすごくアメリカの子を教えたんですね。だから、だんだんにそうやって学校に入っていくと、学校の悪口とか言わなくなりますよ。

【市長】

かかわればね。かかわっていけばね。

【稲垣委員】

今のいいですよ。だから、学校側ももっとやってほしいことをほんとうにオープンにするという、ただ一くりに学級委員とかってなるから、このイメージに人がすごく嫌がってしまうだけで、学級委員も大したことはないですよ。だから、何をしてほしいのかとかがあると、ほんとうにそこに食いついてくる人たちもいると思います。

【松香委員】

学級でも発表になるし、学校全体で東ねてくれる人を募集している、しょっちゅう。プリントでも来るし、連絡も来るし、電話も来るし。

【教育長】

そこですよ。そういうようなものを立ち上げられるというか、ちょっとずつやっていけばそこへつながっていくと思うんですけどね。そんなのをそれぞれ中学校区ぐらいでできないかな。

【市長】

教頭先生がそれをしていると、教頭先生がかわっていくと、またそれで関係なくなってしまうから、地域のところでそういうのができてくるのがいいんでしょうね。

【教育長】

教員の場合は、3年から5年でみんなかわっていくわけですから、3年たったらまたゼロになっちゃうというところがありますので。

【松香委員】

ティーチャーアシスタントというのもよくありましたね。ティーチャーアシスタントって手を挙げると、学校に行くと、先生が、悪いけどこれコピーしてきてとか、そういう使い走りみたいなのを何人か募集したり、そういう。でも、先生は助かったと思います。そんなつまらないことですけど。

【教育長】

助かると思いますけど、それがちょっとという人もいますよね。

【稲垣委員】

だから、先生も、自分が頑張らなければいけないし、やらねばいけないって、日本人気質かな。

【市長】

ちょっと方向性がいろいろあるかもしれませんが、もう特にほかに大分議論もよろしいでしょうか。

では、これで本日の事項は終了となります。

事務局から連絡事項は何かありますか。

【総務課長】

長時間にわたり、ご議論ありがとうございました。事務局から特にございません。次回の開催につきましては、また改めて皆様と時間の調整をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。ありがとうございます。

【市長】

これで本日の事項は全て終わりました。

これをもちまして平成28年度第2回桑名市総合教育会議を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —